

教養コース 文学講座

定員5

小林一茶に学ぶ ― 俳句の作り方、味わい方(全5回)

第1回

テーマ 季節と人生について

日時 令和5年9月3日(日) 10:00~12:00
場所 みずほ台コミュニティセンタ
参加者 29名

講師：東洋大学名誉教授 博士(文学) 俳人
谷地 快一 (たにち よしかず) 氏



プロフィール：

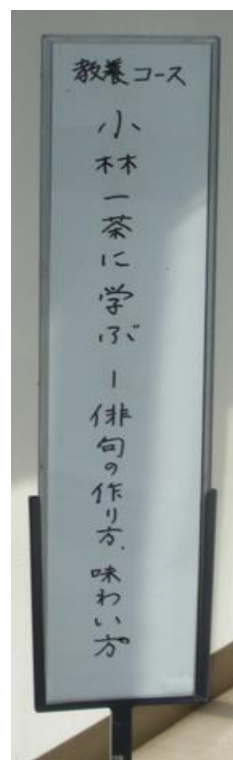
1948年北海道生まれ。俳号海紅。俳人協会会員、日本エッセイスト・クラブ会員。著書に『与謝蕪村の俳景―太祇を軸として』(新典社)、共編著に『芭蕉・蕪村発句総索引』(角川書店)、江戸人物読本『与謝蕪村』(ぺりかん社)、『俳句教養講座』全3巻(角川学芸出版)など。

芭蕉会議 <http://www.basho.jp> を主宰、句集に『九十九句』。

講座の要約

講座や講演を引き受ける講師の悩みは聴講者のニーズがわからない点にある。昨年の「与謝蕪村の世界」(全五回)の感想に「難解だった」というものが多かったのはそのせいかもしれない。

その反省と主催者側の助言を踏まえ、今年は親しみやすさで定評のある小林一茶の句を通して、聴講者それぞれが自分の人生を振り返り、一茶をまねて俳句を作ってみるという実践的な試みをするにしたい(こう話し



ながら、切り短冊が配られた)。

例えば、一茶が十代に家庭の事情で江戸に出て、自分の人生を築こうとする過程は「春や昔この駅を終着とせし」という講師ご自身の俳句を思い起こさせる。これは生家のアルバムから家族写真を一枚抜き取り、もう郷里には戻らない覚悟で北海道を出て上野駅に着いたときの淋しさと覚悟を詠んだつもりだが、聴講者の皆さんにも一茶の講座を通して自分の過去を振り返り、不十分、不完全を気にせずに、俳句に挑戦してもらおうのである。

俳句は広義には俳諧という文芸の一部で、連句の名で今日に受け継がれている。それは会席(座)の文芸で、A氏が詠んだ五七五(長句)の世界を、同席するB氏が七七(短句)で展開する(引き受ける)世界。その面白さは一組の長句・短句に終わらず、五十回、百回と続く形式に発展した。だから、一茶の人生や俳句に共鳴して、そこから自分の俳句を生み出すという訓練は詩歌のまともな学び方なのだ。

